

## ジョン・デューイの芸術性・日常性・生命

作業療法における「作業」との関連から

西野由希子(明治大学大学院理工学研究科博士後期過程)

作業療法(Occupational Therapy)とは、人々の健康と幸福を促進するために、医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である(日本作業療法士協会定義、2018)。筆者は作業療法士養成校で教員をしており、作業療法士としての実践経験もある。作業療法の現場では、治療手段となる創造的活動を「作業」として利用してきた。その背景にあるのは、「すべての人に芸術性が宿る」という考えである。20世紀初頭、創造的活動を用いた療法はヨーロッパですでに取り組みられていたが、米国において初めてそうした取り組みが「作業療法(Occupational Therapy)」と名づけられた。その創始者である精神科医のアドルフ・マイヤー、ソーシャルワーカーのエレン・クラーク・スレーグル、看護師のスーザン・トレイシーは、哲学者であり教育学者であるジョン・デューイの影響を受けていた。作業療法の「作業(Occupation)」という言葉や概念は、デューイの実験学校や社会的弱者支援の拠点であったハルハウスにおける実践から示唆を受けて考案されたのである。

本研究は、1)作業療法の現場での実践をふまえて、デューイの実験学校時代のオキュペーション概念と晩年の美的経験の関係を再検討し、2)彼が芸術性、日常性、生命の連続性をどのように考えていたかを明らかにする。3)その上で、デューイの思想がこれからの作業療法に資する点を問うてみたい。

これまで作業療法における「作業」は、その意味、形態、作用等について議論が続けられてきており一貫した概念とはなっていない。しかし、現代の作業療法における「作業」は、創造的活動に限らず、日常生活の中で行われる行為を含むようになり、むしろその重要性は増している。例えば、「多くの作業は、日常的で日々の生活の文脈の一部となっている。そのような作業は、一般的には当たり前のことで、ほとんどの場合習慣的である。作業は日常的だが、時に特別である。休みの夕食に初めて人を招く準備をしているときや、20周年の家族の休日を祝うためにパイを焼いたりするのは、その例である」(V. Dickie, 2014)。「このような日常的な作業と特別なこととされる創造的な作業は、一見すると相容れない出来事のように思われるが、わたしたちの生活文脈の流れのなかで、それらは入り混じり絡み合っており、実際のところ独立してそれぞれの出来事を切り分けることは困難である。作業療法士であるレイリー(1962)の「人は、精神と意志によってエネルギーを与えられた両手を使うことによって、自身の健康状態に影響を与えることができる」という宣言も、多くの作業療法士が抱いている「すべての人に芸術性が宿る」という考えも、たんに患者に創造的活動をさせることだけを意図するものではない。作業療法士は、患者にとって時に特別な出来事ともなる日常生活において連続的に生成していた作業の中から、ほんのわずかを切り取り、患者にその実践をうながす。作業療法室で患者が再びその作業に触れた時、実に生き生きとした顔つきや態度がかいま見られる。その瞬間、患者はもはや患者ではなくなり、芸術性は日常性の中にこそ宿ることが痛感される。このような作業療法における日常的作業と創造的作業を分けず、生活の中の出来事の連続性としてどちらも重視する視点の発端をなしたもののこそ、デューイの思想にはかならない。

デューイは、1896年に開設した実験学校で仕事(occupation)

を通して子どもを教育し、1890年に開設したハルハウス労働博物館において、移民が分断された社会とのつながりを仕事(occupation)によって獲得する機会を作ろうとした。そうした実践とともに、『学校と社会』(1902)では子どもの芸術的経験の意義について言及している。さらに、晩年の著作である『経験としての芸術』(1934)において、美的経験を重視した芸術論を展開した。この美的経験論はデューイが「心理学における反射弧の概念」(1896)において主張した運動-感覚の調和に根ざしている(鶴見, 1984)。それはまた、デューイの主要概念である有機体と環境の相互作用論に依拠するものでもあるだろう。本発表では、デューイの美的経験を日常性、さらには生命のいとなみとの連続性の中でとらえ返してみたい。

デューイは、生活と芸術との連続性の回復を目指していた。デューイの考える美的経験は、とても素朴なものでもある。そのため、それは特別な人の特権的なものではなく、すべての人が経験しえるものと考えていた。さらに言えばデューイの考える芸術性(美的経験)とは、生き物としての生命が躍動する瞬間のことであり、それが人に生きる力を与える、と見ることもできるだろう。だからこそ、作業療法において治療手段として「作業」を用い、さらに患者が日常生活の流れの中で行えるよう支援が試みられてきたのではないだろうか。そうした観点からすると、患者や障害のある人だけではなく、多くの人にとって日常の中で芸術性のある作業を経験することが、その人の健康や幸福に寄与する可能性があると言えるのではないだろうか。あるべき作業療法を考えることは、あるべき日常を問うことでもある。あらためてデューイの思想に立ちかえる理由はなによりもそこにある。

Reilly, M. (1962). Occupational therapy can be one of the great ideas of 20th century medicine, 1961 Eleanor Clarke Slagle lecture. *American Journal of Occupational Therapy* 16, 1-9.

John Dewey (1902). *The School and Society. The Child and the Curriculum*. The University of Chicago Press. (宮原誠一訳(1957). *学校と社会*. 岩波文庫)

John Dewey (1934). *Art as Experience*. (栗田修訳 (2010). *経験としての芸術*. 晃洋書房)

Virginia Dickie: Chapter 1. What is Occupation? Willard & Spackman's *Occupational therapy* 12 edition. 2-8

鶴見俊輔 (1984). *人類の知的遺産60 デューイ*. 講談社.